

# Vajravidāraṇa-dhāraṇī の功德と 「<sup>ドゥン</sup>gdon」の関係性

田村 宗英

## 0. はじめに

これまでの研究から『Vajravidāraṇa-dhāraṇī (金剛摧碎陀羅尼)』の第一の功德としては「浄化」が挙げられる。特に、現代のチベットにおいては山や川などの自然環境の浄化に対して大きな効果があるとされており、建物を建てる際には必ず Vajravidāraṇa を用いた儀礼が行われる<sup>(1)</sup>。また、天変地異や疫病が流行した場合にも用いられ篤い信仰を集めている。そもそも、これらの天変地異や疫病などの災厄をもたらすものは、それぞれの山や川を治めている神々、龍、場所神と呼ばれるものであるが、これらは「魔物」「悪魔」「祟り（否定的な影響力）」を意味する「<sup>ドゥン</sup>gdon」に属する。この「<sup>ドゥン</sup>gdon」とそれに類する魔物たちについては、原典はもちろんのこと注釈書の中でも言及されており、Vajravidāraṇa-dhāraṇī がこれらを鎮めるのにすぐれた功德があると示されている。

今回はこの「<sup>ドゥン</sup>gdon」に焦点を当てて、原典と注釈書、またチベット常用経典集<sup>(2)</sup>からどのような性質を持つものなのかを考察すると共に、現代チベットにおいてなぜこの陀羅尼が自然環境の浄化に大きな功德があるとして信仰されるに至ったのか、その背景を探っていきたい。

## 1、「gdon（ドゥン）」の概要

### ● gdon（サンスクリット語：graha）

チベット語の gdon の意味を定義付けることは大変難しいが、幸福や繁栄といった喜ばしい事柄を妨げるあらゆるものを象徴的に示したことばである。一般的には、「魔物」「悪魔」「祟り（否定的な影響力）」などと訳さ

『Vajravīdāraṇa-dhāraṇī』の功德と「gdon」の関係性

れ、サンスクリット語では「graha」<sup>グラハ</sup> (3) という。

「魔物」の類を表す語はサンスクリット語・チベット語において多く見られるが、この「graha」は魔物の一種である「bhūta」<sup>ブータ</sup> (チベット語では「byun po」: 「幽鬼」「魔物」「鬼神」などと訳される) の同義語としても使われ、辞書<sup>(4)</sup>では、「狂気など (精神的な病気) の原因となる魔物」、「九種類の惑星」と記されている。

また、インドからチベットへ仏教が移入する以前からチベットに存在するボン教由来の神々に「sa bdag (土地神)」がいる。この神々は、惑星を基にして① Lha (神)、② min (人)、③ gdon (魔物)、④ dur sa (墓地)、⑤ khañ (家屋)、⑥ shiñ (大地)、⑦ pha me (祖先)、⑧ rañ (自己)、⑨ bu tsa (子孫) の九種類に分けられ<sup>(5)</sup>、その3番目に gdon が含まれている。九種類の惑星を基にしている点は、先に挙げた graha の意味内容の一つとも重なる部分であるが、「sa bdag (土地神)」の性質としては土地神ということからしてわかるように、特定の場所への執着が強いものとされる。

これらを総合すると、「魔物」「悪魔」「否定的な影響力」と訳されるチベット語 gdon は、「精神的な病気をもたらすもの」であり、「惑星」や「土地」など特定の場所に関わりが強いものであることがわかる。

次に gdon の種類についてみていくと、チベット語の辞書においては、「魔物 (gdon) には 360 種類ある」とされ、その中でもとりわけ危険な性質をもつ「大悪魔 (gdon chen)」に 18 種類あるとしている。その 18 種類をここに挙げると以下の通りとなる。

- 1、 lha (神)
- 2、 lha min (阿修羅)
- 3、 dri za (乾闥婆)
- 4、 klu (龍)
- 5、 gnod sbyin (夜叉)
- 6、 tshañs pa (梵天)
- 7、 srin po (羅刹)
- 8、 sha za (毘舍遮)
- 9、 yi dwags (餓鬼)

- 10、 grul bum (鳩槃荼)
- 11、 byad stems (放呪鬼)
- 12、 gyeñ byed (懈乱鬼)
- 13、 ro lañs (起屍鬼)
- 14、 mtshun lha (祖先神)
- 15、 bla ma (上師)
- 16、 drañ srong (仙人)
- 17、 rgan po (長老)
- 18、 grub pa (成就者)

gdon の種類には所説ある<sup>7)</sup>が、上記の分類に従って、*Vajravidāraṇa-dhāraṇī* の関連文献における「魔物 (gdon)」にはどのようなものがあるのかを見ていきたい。

## 2、*Vajravidāraṇa-dhāraṇī* 関連文献における「魔物 (gdon)」

まずは、*Vajravidāraṇa-dhāraṇī* 原典に出てくる「魔物 (gdon)」を挙げると以下の通りとなる。

### ■ *Vajravidāraṇa-dhāraṇī* 原典

「あらゆる魔物 (gdon) を破壊する、あらゆる魔物 (gdon) から解放する、あらゆる幽鬼 (byuñ po) をひとつに引き集める、あらゆる幽鬼 (byuñ po) を全滅させる」(Toh750,dsa 265a,7-265b,1)

「恐ろしい魔物 (gdon) による病気」(Toh750,dsa 266b,4)

ここでは、「魔物 (gdon)」とともに「幽鬼 (byuñ po)」が出てきている。「幽鬼 (byuñ po)」は概要のところでも述べたように gdon の一種として考えてよいであろう。*Vajravidāraṇa-dhāraṇī* には、これらの魔物を退ける力があり、恐ろしい「魔物 (gdon)」によって引き起こされる病気に対しても効果があるとしている。

この部分に対してパドマサンヴァバは、

### ■ パドマサンヴァバ註

(原典中の「あらゆる魔物を破壊する、あらゆる魔物から解放する、あら

『Vajravīdāraṇa-dhāraṇī』の功德と「<sup>ドゥン</sup>gdon」の関係性

ゆる幽鬼をひとつに引き集める、あらゆる幽鬼を全滅させる」という部分に対して)

「あらゆる魔物を破壊する」というのは、なしたことが何であれ、悪さ[をするもの]たちを打ち破り、ないものにするのである」

「あらゆる魔物から解放する」というのは、

ある lha yi gdon (神の魔物、skt:devagraha) などをごの中<sup>(6)</sup>に導いてそれら自身がなしたことから離れさせ、本来のあり方にとどまらせる」(Toh2679, 中華大蔵経 36 卷, No.1586, p.457.1.19-p.458.1.2)

ここでパドマサンヴァバは、魔物 (gdon) を「悪さ [をするもの] たち」と定義付けるとともに、その中でも lha yi gdon (神の魔物) を挙げている。また、この後で、「あらゆる幽鬼」のひとつに「śa za ba (食肉鬼、skt:piśāca)」(Toh2677, 中華大蔵経 36 卷, No.1586, p.458.1.3) を挙げている。ここまでパドマサンヴァバの註釈書の中に出てきた「魔物 (gdon)」をまとめると以下の通りとなる。

- ・神の魔物 lha yi gdon (skt:devagraha)
- ・食肉鬼 śa za ba (skt:piśāca)

さらに、「0. はじめに」で触れた部分でもあるが、チベット常用經典集の中での該当箇所は以下の通りである。

■チベット常用經典集

「この Vajravīdāraṇa によって、善なるものに属する護法尊・神・龍・場所神たちと、山や川、住んでいる場所(家屋)などにおける、汚れや罪悪を取り除くために、[汚れや罪悪を]浄化する儀軌を行いたいと望むものは、鏡と器と瓶と素晴らしい香水によって満たされた [注ぎ口のついている] 瓶という浄化の道具と共に、お香と [身代わりとなる] 人形 (glud) などを揃えて、三帰依・菩提心・四無量心を先ず行う」(p.426, 1.4-8)

「その場所にとどまっている守護尊・神・龍・場所神・上師・村の長<sup>(9)</sup>など [それらが] 住処としている寺院・平原(などの自然環境)において約束を破ったことや恨み<sup>(10)</sup>による汚れを打ち叩くなどして取り除き浄化する

る」(p.432.1.6-10)

ここでは、gdon の仲間である神 (lha)・龍 (klu) が挙げられている。場所神 (gshi bdag) については先に挙げた18種類の大悪魔 (gdon chen) には含まれないが、gdon の一種であると同時に、地方神 (yul lha) というカテゴリーに分類される。これは、チベットに古くから存在する「sa bdag (土地神)」と同じような性質をもつとみられる。また、後ろの該当箇所では大悪魔 (gdon chen) に含まれる上師 (グル) も入っている。

これまでにチベット常用經典集の中に出てきた「魔物 (gdon)」を一覧にすると以下の通りとなる。

- ・ 龍の魔物 Klu ḥi gdon (skt:nāga)
- ・ 場所神 gshi bdag
- ・ 上師の魔物 bla maḥi gdon (skt:guru)

ここで、パドマサンヴァバ註とチベット常用經典集に出てきたものを改めて一覧にすると、

- ・ 神の魔物 lha yi gdon (skt:devagraha)
- ・ 食肉鬼 śa za ba (skt:piśāca)
- ・ 龍の魔物 Klu ḥi gdon (skt:nāga)
- ・ 場所神 gshi bdag
- ・ 上師の魔物 bla maḥi gdon (skt:guru)

という、この5種類が挙げられる。

次にこの5種類について、gdon の「精神の病気をもたらす」という性質から、具体的には私たちにどのような影響を及ぼすものなのかを見ていきたい。

### 3、それぞれの「魔物 (gdon)」の性質ともたらす影響について

gdon の影響については、原典の中で「恐ろしい魔物 (gdon) による病気」とあるように、何よりも「病気」<sup>(11)</sup>が挙げられる。また、先にも述べたように gdon は「精神の病気をもたらす」という性質があるが、これに関し

『Vajravīdāraṇa-dhāraṇī』の功德と「<sup>ドゥン</sup>gdon」の関係性

ではチベット仏教医学において事細かに分類されている。その中でもとりわけ精神医学について研究された『チベットの精神医学—チベット仏教医学の概観』(テリー・クリフォード著, 中川和也訳: 春秋社, 1993) において病気の症例が詳述されている。特に、18種類の大悪魔 (gdon chen) の影響について p.241-253 に記述があるので、これに拠りながら病気の症状とそれぞれの gdon の性質を見ていくと、

神の魔物 *lha ḥi gdon*—パドマサンヴァバ註に出てきたものであり、チベット常用經典集での「神 (lha)」もこれに含まれる。ここでいう神々は欲界の神々のことを指すと考えられ、「神の魔物」や「天または神々の祟り (否定的な影響力)」を意味する。これらの影響を受けると、サンスクリット語や好ましい言葉をしゃべり、ほとんど睡眠をとらないという症状が出るとされる。

龍の魔物 *klu ḥi gdon*—これは、チベット常用經典集に出てきたもので、「龍の魔物」「龍の祟り (否定的な影響力)」という意味である。これらの影響を受けると、顔には光沢が出、目は赤く血走り、真っ直ぐ指すような眼差しになる。さらに、ミルクやバターなどの白いもの、肉などの赤いものを欲するとされる。また、龍については、海や湖、川などの水中に棲むとされ、その関連から地下世界を治めるものともいわれる。龍が引き起こす病気としては、上記の症状に加えてハンセン病が挙げられる。ハンセン病と精神的な疾患とは全く関係ないように思われるが、チベット仏教医学では、ハンセン病と精神病は同一の病因グループに分類される。それは、精神と関連の深い体液 (ルン) が大きく影響する。人間の悪い考えや言葉・行為によって体液の不均衡が起きると、龍からの影響を受けやすくなり、結果としてハンセン病にかかってしまうという。これは、龍が水と密接な関係を持つことから、体液とも結び付けられたのだと考えられる。

食肉鬼 *śa za ba ḥi gdon*—これは、パドマサンヴァバ註に出てきたもので

「食肉鬼の魔物」「食肉鬼の祟り（否定的な影響力）」という意味である。「食肉鬼」は、隠れて人間の肉を食らい、血をすするものとされる。これらの影響を受けると、自分自身を恥じ、落ち込んだ態度、また、理由もなく泣いたり支離滅裂な話をするという症状が出るとされる。

上師の魔物 *bla ma hi gdon*—これはチベット常用經典集に出てきたもので、「グル（導師・先生）の魔物」「グル（導師・先生）の祟り（否定的な影響力）」という意味である。これらの影響を受けると、あらゆる子どもと仲良くなり、裸で過ごし、一つの場所にとどまっていることができない。不幸だと感じ、長い間見捨てられているような気持ちを抱くとされる。

以上の四つについては‘大悪魔（*gdon chen*）’に含まれるものであるが、場所神（*gshi bdag*）についてはそれには含まれていないため、前掲書に具体的な病状は記載されていない。

まず、場所神（*gshi bdag*）の性質について確認していくと、場所神（*gshi bdag*）は魔物（*gdon*）の中でも特に地方神（*yul lha*）というカテゴリーに分類される。これは、先に挙げた龍も同じカテゴリーに含まれる。また、場所神（*gshi bdag*）は特定の場所、土地を治めるもので、様々な種類が存在するとされる<sup>(13)</sup>。多くは山の化身とみられ、山地の人目につく岩場に棲んで<sup>(14)</sup>そこを治めるとされるが、川や湖・分水嶺を治めるものもいるようである<sup>(15)</sup>。

地方神（*yul lha*）については、場所神（*gshi bdag*）との性質とも重複する部分ではあるが、自分の場所に対する所有欲が非常に強いとされる。地方神（*yul lha*）に場所神（*gshi bdag*）が含まれることから考えて、より広い地域を治めるものが地方神（*yul lha*）であり、その中の小さな領域を治めるものが場所神（*gshi bdag*）ではないかと推察できる。

ここまで、場所神（*gshi bdag*）について、自分が治める場に対して所有欲が強いと述べてきたが、これは場所神（*gshi bdag*）だけに限らず「魔物（*gdon*）」全体が持つ特徴のようである。先に挙げたチベット常用經典集（p.432.1.6-10）にもある通りだが、前掲書の p.251 において、「魔物（*gdon*）」

## 『Vajravīdāraṇa-dhāraṇī』の功德と「<sup>ドゥン</sup>gdon」の関係性

は森の中あるいは水の中というように場所を持つものだとし、これらの魔物や神々を侮ったり、その住環境を汚す行為は反作用として悪い影響を引き起こすと述べられている。これがまさしく、「魔物 (gdon)」からの悪影響を受ける原因でもある。

「魔物 (gdon)」の性質をここでまとめるならば、自然環境の特定の場所(山や川、森、土地など)を住処とするものであり、その場を汚すなどの行為をしたならば病気などの悪影響を私たちに及ぼすものであることがわかる。

### 4、まとめ・Vajravīdāraṇa-dhāraṇī の功德と「魔物 (gdon)」の関係性

これまで、Vajravīdāraṇa-dhāraṇī 関連文献に登場してきた「魔物 (gdon)」をその性質や特徴を中心に追ってきた。最後にまとめとして、Vajravīdāraṇa-dhāraṇī の功德と「魔物 (gdon)」の関係性を考えていきたい。

「魔物 (gdon)」の性質を改めて挙げるならば、自然環境の特定の場所を住処とし、その場を侵したり、契約を破ったものに対して悪影響を及ぼすもの、その悪影響というのは特に精神的な病気をもたらすものである。これらが Vajravīdāraṇa-dhāraṇī の原典をはじめ関連文献に登場するわけであるが、この Vajravīdāraṇa-dhāraṇī が生まれる背景にはやはりチベット・ヒマラヤ地域の厳しい自然環境があったことは想像に難くない。日本においても山や川、石、大木など自然のものに神や精霊が宿するという思想があるが、チベットにおいても同様であり、その代表が「魔物 (gdon)」であろう。人間はこれらの「魔物 (gdon)」と折り合いをつけて生活していく必要がでてくるわけだが、農作物を作る、建物を建てる、道路を作る等、どうしても「魔物 (gdon)」の領域に侵入せざるを得ない場面に多々遭遇する。そこで、何とかそれらの「魔物 (gdon)」から逃れたいという願いが Vajravīdāraṇa-dhāraṇī という形になっていったのではないかと予測される。現代においては自然環境の浄化に功德があるとして信仰を集めていると述べたが、一方、注釈書においてはそのような記述はみられない。主に「汚れや罪障の浄化」が述べられるのであるが、註7で触れたように、「魔物 (gdon)」は人間の悪い心のはたらきから生じるともされる<sup>(16)</sup>ので、根本的な原因である人間の心の汚れを取り除くことに功德がある

*Vajravīdāraṇa-dhāraṇī* が関連付けられて用いられるようになったのではないかと考えられる。さらに、「魔物 (gdon)」は自然環境に住まうものなので、その住処である自然環境の浄化・「魔物 (gdon)」の鎮めに対して大きな功德がある陀羅尼として現在に至るのではないかと考えられる。陀羅尼の功德と信仰のあり方については様々な事柄が複雑に絡んでおり、今回はその一端について考察してきたが、今後も引き続きその背景を辿っていきたい。

### 《キーワード》

*Vajravīdāraṇa-dhāraṇī* gdon 浄化

### 付記

本論文は、平成25年度笹川科学研究助成（研究番号：25-103）による研究成果の一部である。

- (1) これらについては、田村宗英：『*Vajravīdāraṇa-dhāraṇī*（金剛摧碎陀羅尼）』の儀礼について—現代における実践方法の考察（1）』（『智山学報』第63輯,2014,p.35-45）の中で報告している。
- (2) 『*bla maḥi rnal lbyor dan yi dam khag gi bdag bsked sogs shal ḥdon gces btus bshugs so*』：今日、チベットで宗派や学派を問わず使用されている常用經典集。p.426-441に「*rnam ḥjoms khru chog*」という *Vajravīdāraṇa* を用いた浄化儀軌が収められている。
- (3) √ *grah* に由来する語で、「捕える」「つかむ」「付着する」などの広い意味を持つ。
- (4) Monier-Williams : *A Sanskrit-English Dictionary* (Sri Satguru Publications,1993) p.372  
V.S.Apte:*The Practical Sanskrit-English Dictionary* (Motilal Banarsidass,2000) p.417
- (5) Namkhai Norbu : *Drung,Dew and Bön* (Library of Tibetan Works and Archives, 1995) p.153-154
- (6) Sarat Chandra Das : *A Tibetan-English dictionary with Sanskrit synonyms* (Motilal Banarsidass,2000) p.663
- (7) Nebesky-Wojkowitz,R.D. は *Oracles and Demons of Tibet*(PALJOR PUBLICATIONS,1998,p.311)の中で、『白傘蓋 (gdugs dkar)』という短い經典には424種類の *gdon* が記されていると述べている。

また、ヴィマラミトラは、

■ヴィマラミトラ註

## 『Vajravīdāraṇa-dhāraṇī』の功德と「<sup>ドゥン</sup>gdon」の関係性

(原典中の「恐ろしい魔物による病氣」という部分に対して)

「恐ろしい魔物による病氣」というのは、魔物 (gdon) による 1080 の障りに対して四種法がなされるならば、[それらの] 病氣は治まる。」(Toh2681, 中華大藏經 36 卷 No.1588,p.534.1.19-21)

と説明しており、魔物 (gdon) からの障りが 1080 種類もあるとしている。これは単にたくさん存在するという意味合いだけで使われているだけでなく、「障礙神・妨げ (bgegs (ゲク))」との関連から出てきたものと考えられる。

「障礙神・妨げ (bgegs)」には 84000 種類あり、その内の 1080 種類が魔物 (gdon) と呼ばれる有害な有情であるとされる。その 1080 の内訳として 360 は貪欲から、360 は瞋恚から、360 は愚癡から生じるといふ。(テリー・クリフォード著、中川和也訳：『チベットの精神医学—チベット仏教医学の概観』(春秋社,1993,p.212)

つまり、「障礙・妨げ (bgegs)」という大きなカテゴリーの中に三毒から生じる三組の魔物 (gdon) が存在するという考え方もある。

- (8) ここでは、「仏教の教えの中に導く」という意味であろう。
- (9) 「守護尊」「村の長」については、魔物の仲間に入るのかどうか判明しなかったためここでは検討しなかった。
- (10) 約束を破ったことによって、gdon たちが憤慨し、人間に悪い影響を及ぼすことを「恨み」と表現したと考えられる。
- (11) ここでは特に「恐ろしい魔物 (gdon) による病氣」について考察するが、Vajravīdāraṇa-dhāraṇī 全体の功德をみた場合、「魔物 (gdon) による病氣」だけに限らず、「あらゆる病氣」に功德があると述べている。参考までに挙げると以下の通りである。

### ■ Vajravīdāraṇa-dhāraṇī 原典

「この經典の威力によって、あらゆる有情の恐ろしい諸々の病氣であってもそれら全てが治まることを目の当たりにする」(Toh750,dsa 266b,5)

と述べている。さらにシャバリパは註釈の中で「このタントラの功德として特徴付けられるものはとりわけ浄化である」(Toh26863, 中華大藏經 36 卷 ,No.1594, p.687.1.14-15) としながら

### ■ シャバリパ註

(原典にある「根本」という語を解説して)

「[後に] 取り除くものの根本となり、外的には [その] 特徴から病氣 (nad) を浄化する [ことに長けているので「根本」というのである]」(Toh26863, 中華大藏經 36 卷 ,No.1594,p.687.1.10)

と端的に述べ、Vajravīdāraṇa-dhāraṇī が病氣を取り除くことにおいて功德がある

と示している。

また、パドマサンヴァバは、

■パドマサンヴァバ註

(原典にある「恐ろしい諸々の病氣」という語を解説して)

「天然痘、舌の先が黒くなる〔症状〕など、実に苦しみを伴う完治しづらい重篤な病氣を全て取り除く」(Toh2679, 中華大蔵經 36 卷, No.1586, p.481.l.11-13)

と具体的な症例を挙げて指摘している。

このように原典や註釈書でも *Vajraidāraṇa-dhāraṇī* が「病氣」を取り除くという功德があることを示している。

- (12) 該当箇所は主に『四部医典 (rgyud bshi)』の第3タントラ・第77-79章に関する研究である。
- (13) Namkhai Norbu : *Drung, Dew and Bön* (Library of Tibetan Works and Archives, 1995) p.278
- (14) D・スネルグローヴ／H・リチャードソン著, 奥山直司訳: 『チベット文化史』(春秋社, 1998) p.57
- (15) Nebesky-Wojkowitz, R.D. : *Oracles and Demons of Tibet* (PALJOR PUBLICATIONS, 1998) p.226
- (16) 「魔物 (gdon)」が精神的な病氣をもたらすという点についても、人間の悪い心のはたらきから生まれるという思想から派生したものとも考えられる。